私の思い出。あの日あの味

◎優秀賞

我が家に『オムライス』がやってきた日

石崎勝子（広島県福山市　六十八歳）

昭和三十年代、寺裏長屋の一画に住んでいた私は小学四年生。

五人兄弟の末っ子でベビーブーマー。

路地には子供たちがゴロゴロしていた。

おにごっこ、カンけり、大なわとび、それから〝肉弾〟なんて遊びも。

現代っ子のように、スポーツや遊びにお金や道具なんてしゃれたものをかけるはずもなく、その分、かくれんぼにしても他人（よそ）の台所へ入り込むなんて事がざらだった。

我が家は戦病死した父に代わって、母が一人で五人の子を育てていた。

それこそ死にものぐるいで……若い頃、町の写真屋のショーウィンドーに飾られたというほど〝べっぴんさん〟と呼ばれた母が、まだ五十歳そこそこの年齢でまるで老婆の様にボロボロだった。

いつだったか、教頭先生から「君のおばあさんに渡してほしい。」とプリントを持たされた事をよく覚えている。

「おばあさんじゃない！　お母ちゃんです！」とその場ですぐ訂正できぬまま、ちょっぴり悲しくなった事も……。

その頃から母はあちこち体の不調に悩まされていたのだろう。

ある冬の日など、学校から帰ったら家のこたつの上に祭壇らしきものが置かれ、妖しげな祝詞（のりと）が響いていた事がある。いわゆる〝おがみ屋さん〟だ。

気丈な母の底知れぬ不安。

何を考えていたのか知るよしもないが、まもなく母は台所の改築にのり出した。

子供心に「そんなお金あるんじゃろうか？」と心配する程の家計の中、おくどさんを取り、プロパンガスを備えつけ、三和土（たたき）には注文品の大きな長テーブル。

お尻が乗っかるだけの丸イス六ヶ。

それらが我が家にやってきた時の第一印象は『ウワァ！』の一言。

うれしくて誇らしくてもうそれだけ。

近所で最初の〝ダイニングキッチン〟だった。母が死んでもう四十一年。今さらながら思うのだ。

誰にめいわくをかけるのではない〝家をつつく〟事がどれほど周囲からひがみを買った事かと――。

「後家のくせに」と言われ続け、口紅もささず、はなやかな色の服をいっさい着なかった母の最初の、ぜいたくなんかではない決断。

その頃、長姉二十二歳。

中学を卒業して、市内でも一番大きなダイカスト会社へ勤めていた。

本来は現場作業の学歴だが、成績が良かったのと、字が上手だった為、事務員に回されていたのである。

誰からも、上司からも「さっちゃん。」と名呼びされ可愛がってもらっていたらしい。

その中でも、K部長の奥様が出来た方で、事務員の女の子の事をずいぶんと気にかけて下さり、彼女達を自宅へ招いて、料理を教える等していらっしゃった。それも無料で。

現代では考えられない事だが、田舎っぺの女の子達にとって、その奥様は尊敬に値する女性であったろう。

そして、それは突然やってきた。

ある日曜日の夕食、我が家自慢の長テーブルに光り輝く西洋皿の上にそれはあった。西洋皿自体まだめずらしいのに、おまけにピカピカのスプーンまでそえられている。

普段は茶色いおかずが主流の我が家に、きれいな黄色と赤が目にまぶしく飛びこんできた。おそるおそる一口食べて「ウワァ！　おいしい」。卵の黄色をくずしてみると中のごはんも赤いケチャップライス。

「なんておいしいんだろう。大（お）き姉ちゃん、これどう言うん？」

『オムライス』

我が家の台所がデパートの食堂に変身した一瞬。一気に食べて満足感の余韻にひたった私。あのオムライスは、まぎれもなく私にとって最初のごちそうであった。

『オムライス』なんてやさしい響きでしょう。『オムライス』なんてうれしい味でしょう。『オムライス』なんてゆかしい思い出でしょう。

『オムライス』が我が家にやってきたあの日、私達家族は貧しいけれど、確かに幸せでした。